

ハイスクールラッ
シュ!

月蝕仮免

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

七星剣・ジエント・・・プラズマギャラクシーの英雄のひとり。彼の新たな物語が、異種族の存在する世界で、彼が、『兵藤一誠』に生まれ変わり、新たな物語を生み出す。

目次

プロローグ	1
HUNTING 1	私はね友人と猫は大
事にするのですよ？	9
HUNTING 2	古き友人との再会で
すね	19

プロローグ

プラズマギャラクシー・・・

超エネルギー鉱石『プラズマソウル』を取り込んだ超生物・『プラズマ怪獣』の存在する宇宙

そして、プラズマソウルは、その超エネルギー故莫大な富をもたらすため、それらを入手獲得する『ハンター』達が存在する。

それらをその宇宙の住む者たちは、『大怪獣ラツシュ』と呼んだ。

大怪獣ラツシュ以前、プラズマソウルが発見されたばかりの頃は、プラズマギャラクシーは、大いに荒れていた・・・。

しかし、それを圧倒的な力を持って終息させた七人の英雄達がいた。

彼らは、『七星剣』と呼ばれ、伝説の存在となった。

—
???
—

そして、謎の白い空間に浮かぶ一人の黒い宇宙人がいた。

彼の名は、『メフィラス星人ジェント』。七星人の一人であり、『妖刀・破軍』を操り、その力は、星をも斬る力を持っていた。大怪獣ラッシュのときは、ハンターを束ねるハンターリーダーとしてその手腕を振るった。

しかし、命ある者は、いつかは滅びるもの。ジェントも例外ではなく、命を落とした。

ジェント「・・・とうとう私も死にましたか」

死んだというのに、ジェントは恐ろしいほど冷静に受け止めていた。

？「冷静ですね」

すると、謎の声が聞こえてきた。

ジエント「どなたですか？」

？「えーと、転生担当の神です」

ジエント「ほお？」

神「信じていませんか？」

ジエント「いえいえ、『ガタノゾーア』は、邪神と呼ばれていましたし、違う神もいても不思議ではありません。そう言えば、転生とは？」

神「言葉の通りです。あなたは、偉業を成しましたので転生の認可が下りました」

ジエントは少し考え・・・

ジエント「・・・まあいいでしょう」

神「では、転生の特典を6つ考えてください」

ジエント「それでは・・・」

1、拠点兼訓練用に『ハンターステーション』

2、破軍と現役時代に使っていた武器類

3、前世と同じ身体能力及び特殊能力

4、自分専用のハンターボール

5、前世で溜めていたガネーの転生世界での換金

6、ハンターライセンス

ジエント「こんなところでお願いいたしますよ」

神「わかりました。転生を開始する前に言っておくことがあります」

ジエント「なんですか？」

神「転生先では、あなたの前世の世界の要素が入り込む可能性もあります」

ジエント「つまり、プラズマ怪獣が現れる場合もあると」

神「ええ」

ジエント「構いませんよ」

神「ありがとうございます。あと、あなたの世界のハンターが何人かそちらの世界に現れると思いますので」

ジエント「わかりました」

神「では、七星剣・ジエントよい転生生活を・・・」

—ジエント(?)—

私が目を覚ますと、そこは見慣れた私の部屋でした。

? 『どうした、相棒?』

聞きなれた声が、聞こえました。

ジェント(？)「少し、妙な夢を見ただけですよ『ドライグ』」

私が、この世界の人間・『兵藤一誠』に転生してから数年経ちました。といつても、私はまだ子供ですが。父と母は、私が年の割に大人びているため甘えてほしいと言つてます。

そして、私は、宇宙に隠したハンターベースを使い訓練と情報収集を行いました。

その過程で、この世界には、『悪魔』・『天使』・『堕天使』の三つの勢力とそのほかの勢力が存在し、その歴史を知りました。そして、力を持った『神器』の存在。

二年前、私の神器が発現しました。名は、『赤龍帝の籠手』といい、『二天龍』の片割れの赤い龍(ウエルシュ・ドラゴン)のドライグと言います。発現後すぐ話せるようになったのは、赤龍帝史上私が初だそうです。力も、使えるようになり『覇龍』もできるようになりました。まあ、亜種でしたが。

ドライグ「ジェント、心配事は、いつでも私に言ってもいいんだぞ？」

ちなみに女性です。彼女には、前世の私のことはすでに話しており、私を前世の名で呼んでいるのは、私が、彼女を信頼した証としてそう呼んでもらっています。

一誠「なに、生まれ変わった時にことを夢に見ただけですよ」

ドライグ『そうか』

一誠「さて、今日も訓練しますか」

ドライグ「そうだな」

この日の訓練は、いつもより長く行いました。思えば、私は、これから起こるであろう出来事の数々に気が付きつつあったのかもしれない・・・。

HUNTING1 私はね友人と猫は大事にするのです

よ？

一誠は、深い森の中にいた。

一誠「うむ、成功したようですね」

一誠は、テレポートで冥界へ行けないか訓練を行った。結果は成功し冥界の『使い魔の森』にテレポートしたのだった。

一誠「少し歩きますか」

一誠が散策しようとしたとき・・・

『助けてだガネ〜〜〜!!』

ものすごく覚えのある声と、その声の主が、こっちに向かって走ってくるのが見えた。その後ろには、ドラゴンらしきものの姿が見える。声の主は、黄色っぽい体にカタツムリのように飛び出た目。口がガマ口のようになっていて目と目の間に眼鏡をかけていた。

一誠「彼も来ていましたか」

そう呟いた一誠は、破軍を取り出し駆け抜け……。

一誠「はあ！」

ズバツ！

一撃で、そのドラゴンを気絶させた。

？「た・・助かったガネ〜。ありがとうだガネ〜」

ドライグ『このドラゴンはもしや・・』

一誠「無事でよかったですよ。『カネゴン・アキンド』」

？「な、人間!?!なんでここに!?!それになんでオイラの名前を知ってるガネ?」

助けたのは、『カネゴン・アキンド』。『コイン怪獣』の別名を持つ怪獣で、ハンターベースで、武器（欠陥もあるが）や雑貨などを売ったり、ハンターを転送したり、回収したプラズマソウルの換金などを行っていた。

一誠は、おもむろに破軍を見せた。

カネゴン「それは、七星剣・破軍!?!なんで、ジエントの・・まさか!?!」

カネゴンは、目を見開いて一誠をマジマジと見た。そして、雰囲気がかつて世話になったメフィラス星人の物と非常に似ていたことに気が付いた。

カネゴン「……ジエント……なんだガネ？」

一誠「久しぶりですね。カネゴン」

その言葉を聞いた途端、カネゴンの目に涙が浮かび……

カネゴン「ジエンド~~~~!!」

カネゴンは、泣きながら一誠に抱きついた。

カネゴン「怖かったガネ〜！寂しかったガネ〜！」

一誠は、カネゴンが落ち着くのを待って自身のことを話した。そして、カネゴンのことを聞いた。どうやら、この世界では、『カネゴン』という種族は、希少価値な種族らしい。剣族にするよう迫ってきた悪魔にカネゴンを除いて殺されてしまったらしい。生き残ったカネゴンは、この森にたどりついたが、運悪く先ほどのドラゴンが寝ていたところを尻尾を踏んでしまい怒らせてしまい逃げたそう。

カネゴン「ジエントはやっぱり凄いだガネ〜♪あ、そうだ。オイラを使い魔にしてくれだガネ〜」

一誠「いいのですか？」

カネゴン「ジエントならいいだガネ〜」

一誠「む？ドラゴンが起きるようですね」

ドライグ『ジエント、こいつは面倒な奴だ。人間界に戻るぞ！』

一誠「そのようですね。カネゴン、一旦人間界に行きますよ」

カネゴン「わ、わかったガネ〜」

一誠にせかさされたカネゴンは、一誠にしがみつきそのまま二人は、テレポートした。

目を覚ましたドラゴンは、匂いをかぎだした。

？「覚えたぞこの匂い。油断していたとはいえ、私を気絶させるとは・・確か、ジェントと呼んでいたな」

ドラゴンは、意識を取り戻し始めていたときに聞いた名前をおぼろげながら覚えていた。

ドラゴン「必ずまた会うぞ。この『ティアマツト』とな！」

一方、人間界に戻ってきたが・・・。

？「なんなんだ貴様は!?!」

何故か周囲に悪魔が多数いた。そして、二人の後ろには、傷ついた黒い猫と白い猫が

いた。

一誠「やれやれ、悪魔が動物虐待とは見苦しいですねえ」

悪魔「なんだと!?・・・む、カネゴン族だと? 貴様、そいつをよこせ。命だけは助けてやる」

一誠「断りしますよ。あなた達のような下品な方々に友人を売ったりはしませんよ」

悪魔「人間の分際で! 殺せ!」

悪魔に指示を受け、その悪魔の手下らしき悪魔たちが一斉に襲いかかってきたが：

一誠「はっ!」

一誠は、破軍を出し横一閃に斬撃を放った。

ぐわあああああああ
!!!?

その斬撃の一撃で、悪魔と手下達は、全て気絶してしまった。

一誠 「品性のある悪魔はなかなかいませんねえ・カネゴン、その猫さん達は どうですか？」

一誠 後ろでは、カネゴンが先ほどの二匹の猫を介抱していた。猫の方は、疲れ果てていたのか気を失っていた。

カネゴン 「外相は軽いガネ。手当てして休ませてあげればいいガネ」

一誠 「カネゴン、ベースへ行きますよ。そこが、あなたの住居になります」

カネゴン 「やった〜♪これで職住に困らないガネ〜」

一誠 「そういうことです。猫さん達もそこで治療しましょう」

そう言い、二人は、猫達と共にテレポートしていった。

そして、しばらくして悪魔たちが目を覚ました。

悪魔「あの人間め！今度会った時は必ず・・・！」

？「貴様らに次はない」

チャキ

悪魔「な!？」

悪魔の首に、大きな死神のような鎌があてられた。

？「貴様の悪行は、全て暴露され、魔王より捕縛もしくは、処刑せよとの命が下った」

そう言い謎の人物が手をかざすと、悪魔たちは、光の鎖のようなもので捕縛され更に一人一人にオレンジ色の棺のような光が現れ、それぞれを包み込み、一瞬光ったかと思うと、そこには悪魔たちの姿はなく、その人数分のカードがあり、カードには悪魔たちが描かれていた。

そして、そのカードの全てが、鎌を持った者の手に収まった。

？「任務完了・・・ん？」

男は、周囲を観察した。斬撃のような跡があり先ほどの悪魔たちが何者かと戦っていたのではないかと考えた。そして、なにより・・・

？「この斬撃の跡・・・まさか」

男はある考えに行きつき、懐かしむような笑みを浮かべその場から離れていった。

？「お前も来ているのだな・・・ジエント」

HUNTING 2 古き友人との再会ですね

一誠は、カネゴンと共に二匹の猫を連れてハンターベースにやってきた。ここには、負傷者を治療するメディカルルームがあり、特殊なエネルギーを照射することで怪我をいやすことができるのである。これを使い、猫の怪我は、完治した。その後、カネゴンは、ハンターベースに残り、一誠は、猫を連れて帰宅した。両親に、猫を飼っていいかと聞きあつさりOKをもらった。この間猫は、気を失つたままだったのだが・・・

一誠が、風呂からあがると・・・

母「きやあああああ!?!」

父「ななんだっ!?!」

二人の悲鳴を聞き、一誠が二人の所につくとそこには、猫がおらず・・・

二人の女の子がいた。

？「あ、ばれたにや！」

？「姉さま」

まだ驚きから立ち直っていない両親の前に出て、一誠は、二人に話しかけた。

一誠「あなた達は？」

？「『黒歌』にや」

？「『白音』です」

二人の話を聞くことにした。両親は、かなり興味心身だった。この二人は、猫の妖怪で両親が亡くなり放浪したときに襲われたことを話し、ここを去ることを話すと・・・

母「あなた達、うちの子にならない？」

父「おお、いい考えだ」

黒歌「えっ？でも・・・」

白歌「御迷惑では？」

母「気にしないでいいわよ？女の子がいたほうが面白そうだしね♪」

父「もうまんたい」

一誠「賑やかそうですし構いませんよ」

この日を持って、二人は、『兵藤黒歌』、『兵藤白音』となるのであった。其れから一年後、両親は、海外へ共働きに出ることになり黒歌が、兵藤家を切り盛りすることになった。ちなみに、一誠の秘密やカネゴンのことも両親に話しており、一誠は、拒絶される

と思っただけだが、逆にそれすらも両親は受け入れた。

一誠『本当に、あなた達の子に生まれて私は幸せ者ですよ』
と、一誠は言っていた。

ある日、一誠は、白音を鍛えるため、ある山の中に来ていた。白音は、一誠がジエントだった頃の現役時代の『ナツクル』と『トンファー』を貰い、其れを使いこなす訓練を続けていた。そして、夕暮れ時、二人が下山しようと歩いていたとき。

一誠「む？妙な感じがしますねえ」

一誠は、なにか変わったものを感じ取った。一誠の言葉を聞き白音は、猫又の力を使いそのが何なのかを探った。

白音「・・・兄様、近くで結界が張られています」

一誠「穏やかではありませんねえ」

ドライグ『どうするんだ、ジエント』

一誠「・・・行きましょう。私達に災いをもたらさないうちに原因を解決したほうがいいでしょう」

そういい、二人（と一匹）は、結界へと入って行った。

二人が奥に進むと、そこには武装した集団に襲われている。二人の親子がいた。

白音「兄様」

一誠「時間はなさそうですね。白音、仕掛けますよ」

そういうと、一誠は、拳を合わせてそこから波状の光線を発射し、集団の半数を吹き飛ばした。これは、メファイラス星人の得意とする光線の一つ『ペアハンド光線』である。

一誠「いきますよ」

白音「はい」

一誠は、白音の訓練用にとってきたグレートソードを持ち、白音は、トンファーを構えて残った集団に突撃していった。

一誠「ふん！」

白音「はあっ！」

二人の奇襲は、成功し、集団は次々と倒されていった。そして、二人は、親子をかばうかのように立った。

男「貴様ら、何故その親子をかばう!? その女は、異形と結ばれ、子供は汚れたものなのだぞ!!」

一誠「知ったことではありませんねえ」

白音「喋らないでください変態集団」

男「なんだと!？」

一誠「異種族との混血は、古い考えを持つ者には許さないものでも一般常識には『希望』なのですよ」

男「希望だと？」

一誠「種族を超えてわかり合い愛し合える。其れが、新た道への希望となります。其れを理解できないのであればあなた方に未来はありませんよ？」

男「だ・・だまっ・・」

バキイイイイン!

男が叫ぼうとしたとき、結界が破壊され、二人の堕天使と思しき男が突っ込んできた。

堕天使 A 「敵は!？」

堕天使 B 「あなたの家族と二人を護っている男女以外全てです」

堕天使 A 「よっしゃ」

堕天使 A は、ガトリングのようなものを取りだし構えた。

一誠 「ほお、『彼ら』ですか」

堕天使 A 「ガトリングショット!!」

ガガガガガガッ!

男「ぐわああああああああつ！」

ガトリングから放たれたエネルギー弾は集団に降り注ぎ壊滅状態に追い込んだが、逃走しようとする者達もいたが・・・

墮天使B「逃がしません」

そう呟くと墮天使Bは、拳銃を出し・・・

墮天使B「アクセルショット！」

墮天使Bは、身体強化を使って全力で逃げようとする集団をそれ以上とも言える銃さばきで次々と全てを撃破した。周囲に敵がないことを確認した、墮天使Aは、一誠と白音を左右に押しつけて親子に駆け寄った。

墮天使A『朱璃』『朱乃』無事か!？」

女性「あなた！」

少女「お父様！」

墮天使A「大丈夫か!?!どこも怪我はないか!?!」

墮天使B「落ち着きなさい。『バラキエル』」

朱乃「『ドーナシック』おじ様」

ドーナシック「バラキエルは、あなた達が心配で仕事を放り出してきて、私は連れ戻しに来たのですが・・・お二人とも無事でよかったです。バラキエル彼らにお礼を言わないといけませんね」

ドーナシックと呼ばれた墮天使は、バラキエルと呼ばれた墮天使にそう言った。言われた、バラキエルは、一誠達の方を向いた。

バラキエル「俺は、バラキエル。こいつは、ダチのドーナシーク。で、女房の『姫島朱璃』と娘の『姫島朱乃』だ。ありがとよ」

一誠「彼女は、兵藤白音。そして、私は兵藤一誠・・・赤龍帝ですよ」

そう言いながら、一誠は、自身の神器である『赤龍帝の籠手』を出して見せた。バラキエルとドーナシークは、目を見開いて籠手を見た。

バラキエル「・・・なるほどな。おめえが、今代の赤龍帝か。だが、それだけじゃこの二人を守る理由としては、不足じゃねえか？」

一誠「その理由は、すぐわかりますよ。『ガッツガンナー・ガラム』。『ガッツウオツチャー・シーズ』」

一誠の言葉に、二人は先ほどまで以上に目を見開いた。

ドーナシーク「なぜ・・・」

バラキエル「俺達の前を知って・・・まさか!？」

バラキエルは、一誠をマジマジと見て雰囲気な懐かしさを感じた。その懐かしさを確信に変えさせるためか一誠は、破軍を出し地面に突き立てた。

ドーナシーク「破軍・・・！」

バラキエル「・・・やっぱ、てめえジエントか!？」

一誠「お久しぶりですねえ。お二人とも」